

祭礼時における町家及び町並みのしつらえの実態 —新潟県村上市の村上大祭・瀬波大祭・岩船大祭を対象として—

正会員
同

○山奇 彩*
岡崎篤行**

祭礼 しつらえ 村上市

1. 背景と目的

祭は現在では日本の伝統的文化の継承において大きな役割を果たしている。またその様な歴史ある祭では町並みへのしつらえが行われて来ており、伝統的家屋・町並みに溶け込み祭礼時の非日常的な空間を演出する役割を担っている。

新潟県村上市中心部は16世紀初期から城下町として形成され始め、祭の舞台となる旧町人地では3割弱の歴史的建造物が残っている¹⁾。そこで行われる村上大祭は今年で370年の歴史を持ち、祭本来の姿と伝統的しつらえを伝えている。また同市内で他に瀬波大祭・岩船大祭が行われる。

本研究は村上大祭を対象にしつらえの現状を把握し、三祭のしつらえの特徴及び町内ごとのしつらえの特徴を明らかにする事を目的とする。

2. 調査対象の概要及び方法

村上大祭は西奈彌羽黒神社の遷座を記念して始まり、御神輿3騎に続き19台のおしゃぎりと呼ばれる山車が巡行。瀬波大祭は山車が5台、岩船大祭は9台巡行し共に始まった時期は定かではない。

調査は旧町人地内の山車を出す19町内のうち山車が通る18町内(泉町を除く)の巡行路沿い及びそれに囲まれる範囲で行った(図1)。しつらえを町並みと町家の屋外・屋内に分け、範囲内の提灯等町並みのしつらえ状況と町家のしつらえ(提灯・簾・紅白幕・建具)(屏風・御神酒・御幣)の7項目を調査し村上の町内ごとのしつらえの残存状況や特徴の違いを把握する(写真1・2)。瀬波大祭・岩船大祭も同様の条件で行い三祭におけるしつらえを比較する。

3. 町並みのしつらえ

三祭で見られた町並みのしつらえ要素は表1に示す通りである。町名入り提灯と額提灯が三祭共通で見られた。瀬波・岩船においては全ての町内で町会所に町名入り提灯

や、当宿(持ち回りの屋台の当番)を意味する当宿提灯などが見られた。一方村上大祭では、対象とした18町内のうち町内名入り提灯と額提灯(写真3)は1町内でしか見られず、また提灯の他に青竹に注連縄が付いた物が見られたが(写真4)それも18町内中7町内で10箇所のみであった。

4. 町家のしつらえ

(1)しつらえ要素の概要

提灯：夜通し行われる祭りでの道標的役割を果たしている。村上大祭ではその8割強が丸

い形をした桜提灯で、その中でも桜模様だけの物や屋号や名前が書かれた物がある。桜模様のみが68.1%を占めており、次いで多いのが屋号入りの12.5%である。(写真5)簾：信仰的なシンボルとして考えられてきたおしゃぎりを直接見るのは失礼とされ簾越しに見る。1~3本の黒線が入り、村上大祭では三本線が76.2%を占める(写真6)。簾の模様の種類が最も多く見られたのは瀬波大祭であった。

紅白幕：神の空間と実生活空間を区切る結界としての意味がある。縦縞と横縞の2種類が見られ、古い写真よりかつては横縞で統一されていた事が分かる。(写真7)

御幣：神様を守る力がある。かつて神社に奉納された御神馬が鞍につけて巡行していたが、それが見られなくなり、各戸に飾るようになったと考えられる。その事から村上の御幣は鞍を模した土台に立てられている。(写真8)

屏風：日常の生活空間を隠し、神を迎える為に家を清める意味がある。紅白幕同様、日常と祭礼空間を区切る(写真9)。

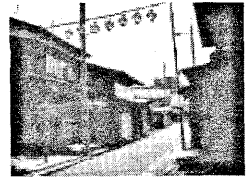


写真3 額提灯(瀬波)



写真4 青竹(村上)



写真1 屋外のしつらえ



写真2 屋内のしつらえ

表1 三祭で見られた町並みのしつらえの要素

村上大祭	瀬波大祭	岩船大祭
町名入り提灯	町名入り提灯	町名入り提灯
額提灯	額提灯	額提灯
青竹	青竹	のぼり
	のぼり	当宿提灯
	御船宿提灯	

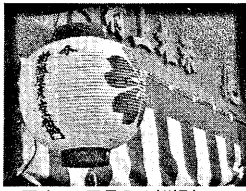


写真5 屋号入り提燈



写真6 簾(黒二本線)



写真7 横縞の紅白幕



写真8 御幣



写真9 屏風

(2) 屋内のしつらえの実態

調査は屋外から見える範囲で行った。対象範囲内の建物総数に占める割合が、村上5.7%、瀬波7.0%、岩船1.5%と全体的に低い結果であった。また屏風・御神酒・御幣の他に、掛け軸や山車の模型を飾っている所も見られた。

(3) 屋外のしつらえの実態

1) 三祭の比較：表1より7つの要素の中でどれか1つでもしつらえをしている割合では、瀬波・岩船が60%前後であるのに比べ、村上では43.5%と半数に満たない。要素ごとに見ても全体的に低い割合である。また祭礼時の町並みに、より影響を及ぼすと考えられる屋外のしつらえのみで表3の様にタイプ分けし、その傾向を見ると瀬波では紅白幕はほとんど見られず、提灯・簾・建具が66.9%、逆に岩船では簾はほとんど無く提灯・紅白幕が54.3%と、各祭りのしつらえの明確な傾向が見られる。村上ではその様な傾向は見られないが、多くの要素が残っていると言える。また村上には要素1つのみで飾られる場合が多く、いくつかの要素が組み合わせられることで、その連続性が祭礼空間の美しさを実現していた本来の姿とは変わって来ている。しかし4要素全て飾っている場合も村上が一番多い。

表2 しつらえタイプの分け方と三祭の傾向

要素	村上(1531件)	瀬波(214件)	岩船(601件)
提灯	446(29.1)	110(51.4)	329(54.7)
簾	235(15.3)	117(54.7)	3(0.5)
紅白幕	188(12.3)	8(3.7)	366(60.9)
建具外し・開け	438(28.6)	116(54.2)	132(22.0)
屋外全体	665(42.8)	133(62.1)	370(61.6)
屋内			
屏風・つい立	83(5.4)	15(7.0)	7(1.2)
お神酒	14(0.9)	7(3.3)	1(0.2)
御幣	12(0.8)	1(0.5)	2(0.3)
屋内全体	88(5.7)	15(7.0)	9(1.5)
どれか1つでも 当てはまるもの	664(43.4)	133(62.1)	370(61.6)

表3 要素ごとに見た三祭のしつらえ

タイプ	提灯	簾	紅白幕	建具	村上(655件)	瀬波(132件)	岩船(368件)
一 種類	1	○			98(15.0)	4(3.0)	1(0.3)
	2		○		42(6.4)	5(3.8)	0(0)
	3			○	34(5.2)	0(0)	33(9.0)
	4				43(6.6)	2(1.5)	0(0)
小計				217(33.1)	11(8.3)	34(9.3)	
二 種類	5	○	○		28(4.3)	6(4.5)	0(0)
	6	○		○	24(3.7)	0(0)	200(54.3)
	7	○		○	115(17.6)	3(2.3)	1(0.3)
	8		○	○	0(0)	0(0)	0(0)
	9			○	53(8.1)	15(11.4)	0(0)
	10			○	36(5.5)	1(0.8)	8(2.2)
小計				256(39.1)	25(19.0)	209(56.8)	
三 種類	11	○	○	○	2(0.3)	2(1.5)	2(0.5)
	12	○	○	○	96(14.7)	89(67.4)	0(0)
	13	○	○	○	67(10.2)	5(3.8)	122(33.1)
	14		○	○	2(0.3)	0(0)	0(0)
小計				167(25.5)	96(72.7)	124(33.6)	
全て	15	○	○	○	15(2.3)	0(0)	1(0.3)

2) 村上大祭における町内の特徴：村上全体では42.3%が屋外のしつらえを行っているが、町内別に見ると寺町の20.5%から庄内町の64.7%までの開きがある(表3)。村上全体では要素2種でしつらえがされているタイプが最も多いが、羽黒町・上町・寺町・大工町・片町・上片町では要素1種のみで飾られている場合が50%以上ある。小国町・庄内町では、3種以上の要素でしつらえがされている所が多く見られる。

上町・大町・小町の中央商店街では商店街名入りの提灯が見られ、これは三祭通してもこのみであった。

紅白幕は村上全体では縦縞と横縞が半々で混在しているが、横縞が見られるのは18町内中小国町・鍛冶町・肴町・庄内町のみで、その他では縦縞のみであった。

5. まとめ

(1) 村上大祭・瀬波大祭・岩船大祭の町並みのしつらえ要素は、町内名入り提灯・当宿提灯・青竹・のぼり額提灯がある事が分かった。町家のしつらえでは屋外には提灯・簾・紅白幕・建具は必ずしがあり、各要素の中でも多くの種類が存在した。また屋内では屏風・御神酒・御幣があるが、その他各自に工夫したしつらえも見られた。

(2) 三祭通して町並みのしつらえと町家屋内のしつらえの実施率は、町家屋外のしつらえに比べ低い。

(3) 村上大祭のしつらえは瀬波大祭・岩船大祭に比べ実施率が下回っており、しつらえに明確な傾向は見られない。しかし要素の数では最も残っている。

(4) 村上の中でも町内でしつらえの実施率には開きがあり、要素の種類や組み合わせにも特徴が見られた。

【参考文献】1) 佐藤憲明, 「城下町村上の旧町人地における歴史的建造物の現存状況」日本建築学会大会学術講演梗概集, p493-494, 2002

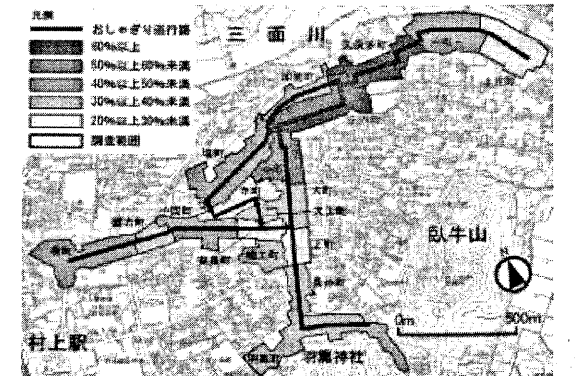


図1 主要なおしやぎり巡行路と調査範囲及びしつらえの分布

*インネット株式会社

**新潟大学工学部建設学科 助教授・博士(工学)

*Innet Ltd.

** Assoc. Prof., Dept. of Civil Eng. and Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.